



SUNTORY HALL

30th

サントリーホールへの取り組みは、世界への贈り物です。

Special Interview TSUYOSHI TSUTSUMI × H.E. CAROLINE KENNEDY

世界一美しい響きを求めて

サントリーホールは2016年に開館30周年を迎えます。いまや音楽界をリードするホールとして、国内外からも高い評価を受けています。今回、開館30周年を記念して、サントリーホールで音楽を楽しまれることの多いキャロライン・ケネディ駐日アメリカ大使と、日本を代表するチェリストでサントリーホール館長 堤剛により、サントリーホールと音楽についてお話しいただきました。

館長 堤剛(以下館長) 本日はようこそサントリーホールにおいてくださいました。大使には、度々公演をお聴きいただいております。**キャロライン・ケネディ大使(以下大使)** 駐日アメリカ大使になってから、思いがけない発見がたくさんありましたが、そのひとつが、自分が交響曲が好きだということです。サントリーホールが我が家のすぐ近くにあるおかげで、来日以来2年間で聴いた演奏会の数は、ニューヨークで過ごした10年間よりも多いのです。ニューヨーク・フィル、ボストン交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団…いくつもの米国の名門楽団の演奏を聴きにくることで、私の生活はとても満たされたものになっています。サントリーホールは、音の響きだけでなく視覚的にも美しいホールですね。

館長 ありがとうございます。開館当時、30年前の日本では、クラシック演奏会といえばかしこまって拝聴するもの、という考えが主流でしたけれど、サントリーホールは違いました。「音を楽しむ」と書いて音楽でしょう。美しい空間で寛いで演奏を聴き、ホワイエでグラス片手に喜びや感動を語り合い、人の輪が広がっていけばいいなど。社交場のようなホールを目指してきたんですね。

幼いときに愛する人たちと
芸術体験を共有することが、
どんなに大きな意味をもつか。

大使 音楽家たちは皆、口を揃えて私に語るのです。日本の聴衆がいかに素晴らしいか、ということ。ヨーヨー・マのようなクラシック音楽の巨匠、ハービー・ハンコック、ジョン・ボン・ジョビといったミュージシャンが「日本の聴衆は情熱的で音楽への造詣が深く、誠実だ」と。日本人は舞台芸術を深く敬愛していますね。だからこそ、私はこの日本で大使という職を務めることを大変名誉に感じています。

館長 大使はクラシック、ジャズ、そしてロックもお聴きになるのですね。

大使 私はロックが好きですし、夫はジャズのファンです。子どもたちのおかげでヒップホップにも親しんでいます。Perfumeの東京ドーム公演や初音ミクの日本武道館公演にも行きましたよ。私は日本語が話せないで、コンサートは日本の文化を体験し、日本の聴衆を身近に感じて音楽を楽しむとてもよい機会なのです。

館長 素晴らしいです。ご家族とともに多岐にわたる音楽を楽



堤剛

サントリーホール 館長

キャロライン・ケネディ

駐日アメリカ大使

写真：馬場道浩

TSUYOSHI TSUTSUMI

Profile 名実ともに日本を代表するチェリスト。桐朋学園子供のための音楽教室、桐朋女子高等学校音楽科を通じ齋藤秀雄に師事、1961年アメリカ・インディアナ大学に留学し、ヤン・シュ・シュタルケルに師事。63年ミュンヘン国際コンクールで第2位、ブダペストでのカザルス国際コンクールで第1位入賞を果たし、以後内外での本格的な活動を開始。現在に至るまで日本をはじめとするアジア各国、北米、ヨーロッパ各地、オーストラリア、中南米など世界各地で定期的に招かれ、オーケストラとの協演、リサイタルを行っている。2001年より霧島国際音楽祭音楽監督。09年秋の紫綬褒章を受章、13年文化功労者に選出。1988年秋より2006年春までインディアナ大学の教授を務め、04年4月より13年まで桐朋学園大学学長を務めた。07年9月、サントリーホール館長に就任。日本芸術院会員。

H.E. CAROLINE KENNEDY

Profile 2013年駐日アメリカ大使に就任。女性として初の駐日アメリカ大使である。大使指名以前は、弁護士、作家、編集者として活動。執筆、共同執筆、または編集した本の数は10冊を超え、ニューヨーク・タイムズ紙、ニューズウィーク誌、タイム誌にも記事を寄稿した。教育など公共サービスに献身的に取り組み、公立学校基金の副理事長および名誉理事、ならびにニューヨーク市教育委員会の戦略的パートナーシップ部門の最高責任者を務めた。また、多数の非営利組織、理事会、財団の理事を務めた。ハーバード大学で学士号(美術学)、コロンビア大学で法務博士号を取得。父はジョン・F・ケネディ第35代米大統領、母はジャクリーン・ブービエ・ケネディ。家族は、芸術家でデザイナーでもある夫のエドウィン・アーサー・シュロスバーグと、3人の成人した子どもがいる。

しまれているのですね。大使がお小さい時には、どんな音楽を聴かれましたか？

大使 こどもの頃、夕食のときに弟と一緒によく聴いたレコードは、プロコフィエフの「ピーターと狼」です。今でも嬉しいときに思わず口ずさむほどです。母はバレエを観に連れて行ってくれました。幼いときに愛する人たちと芸術体験を共有することがいかに大切か、将来の自分にとってどんなに大きな意味をもつのか—大人になるにつれ、わかってきました。ですから、私の子どもたちにも、同じような形で芸術に触れる機会を設けてきました。

館長 おっしゃる通りですね。サントリーホールでも、オーケストラ演奏を聴く「子ども定期演奏会」やバックステージの見学もある「オルガン探検隊」、美術と音楽をともに楽しむイベントなど、こどものための音楽教育プログラムを継続的に開催しています。子どもたちにとってスペシャルな忘れられない体験となれば、こんなに嬉しいことはありません。

響き合う文化を大切に、
伝統を重んじながら
新たなチャレンジを。

大使 私は大使着任の前にニューヨーク市の学校の活動に携わっていたのですが、市内の公立学校には110万人以上の生徒が通い、子どもたちが家で話す言語はじつに140を超えていました。世界中から集まった同級生たちの異なる文化について理解を深めるために、芸術、特に音楽の分野に力を注いでいました。もし、若いときに芸術に触れることができれば、創造性や想像力を重んじるようになります。そして、時や空間を超えて、共通の人間性を見いだすことができるでしょう。

館長 サントリーホール 30周年のメッセージ “Hibiki to the World”にも、世界をまとめていく上で、響き合う文化が非常に大切であるという思いを込めています。リーディングホールとしては、伝統を重んじながら新たなチャレンジを続けていくことが求められています。日本、世界の音楽界を引っ張っていけるように、若い世代の芸術、新しい音楽をサポートしたいと願っています。

大使 21世紀において、文化的市民権はきわめて重要になるでしょう。卓越した芸術を守り、芸術的遺産を次世代に残そうとするサントリーホールの取り組みは、世界への贈り物ですね。